極西への両義的感情をめぐって

八木久美子著
『アラブ・イスラム世界における他者像の変遷』
現代図書　二〇〇七年二月

私たちは乱暴にも「欧米」などとまとめて十把一絡げ、まるでひとつのまとまりであるかのように表す。しかし、「欧」と「米」が私たちにその存在感を押しつけてきた時期と形が違うことを考えるとき、このふたつは一緒くたにすることなどできないことがわかるはずだ。この場合の「私たち」というのは、「欧」でも「米」（北「米」）でもない、その大半がかつてどちらかの植民地であった地の人々のことを指す。つまり、世界中の大多数の人々のことだ。

思うにアメリカ合衆国というのはつくづくと不思議な国だ。自身、植民地であったところから独立を成し遂げると、百年ちょっと後にはヨーロッパの列強の後を継ぐかのように唯一の大国に成り上がった。しかも、そのイメージとは裏腹に、かつての列強ほど広大な植民地を獲得したわけではない――もちろん、フロンティアの拡大というのが海外ではないという理由だけで植民地拡大活動だとみなされないならば、ということだが――にもかかわらず、だ。

ヨーロッパ人たちによるある特定の外地の表象を分析しポストコロニアル批評の古典となったエドワード・サイードの本が『オリエンタリズム』と銘打たれたのならば、そのカウンターパートたるべき『オクシデンタリズム』が書かれたとしても何の不思議もないし、事実、書かれてきた。James G. Carrier ed., *Occidentalism: Images of the West* (Cambridge: Oxford U. P., 1995) やイアン・ブルマ＆アヴィシャイ・マルガリート『反西洋思想』堀田江理訳（新潮選書、二〇〇六）などだ（後者の原題も *Occidentalism* という）。

しかしこれらの書物、前者は論文集で視座（つまり、誰が西洋をイメージしているのかということ）は多様だし、後者は「『敵』によって描かれる非人間的な西洋像」（同書、一七ページ）を「オクシデンタリズム」と定義する点にかけて、いささか偏っているというべき。さらには両者とも「西洋」、「オクシデント」の概念が、やはりヨーロッパもアメリカ合衆国も無前提に含んでいるようである。充分な差異化がなされていないのだ。結局は「欧米」なのか。

八木久美子『アラブ・イスラム世界における他者像の変遷』（現代図書、二〇〇七）が、こうした「オクシデンタリズム」分析における先行書に比して誇るべき点は、主にエジプトのアラブ人たちが見たヨーロッパ像とアメリカ合衆国像を通時的にたどっていることだ。視座は一定しており、表象の対象となる「欧米」が局面ごとに分断され分析されているのだ。ひとりの学者が個人の仕事として腰を据えてやった労作ゆえの利点ということだろうか。

エジプトはフランスに占領され、イギリスの実質的な支配下に置かれ、独立後には特に第三次中東戦争からこの方、パレス

チナ問題を通じてアメリカ合衆国との難しい関係を保ってきた地域だ。こう概観するだけでもヨーロッパに対する態度とアメリカ合衆国に対する態度に差異が生じてきそうなことは予想できるというものだ。

本書の中で八木氏が行っていることは、作家やジャーナリスト、学者たちの文章（小説やエッセイなど）から映画までを取り上げて、それが表象している土地、時代、局面によって区分けし、個々に分析するという作業だ。「隣人としての異教徒」、「西洋という他者」、「アメリカという記号」という三つの章に分割され、それぞれの章がさらにいくつかの節に区分されている。ひとつの節でひとつの書物(や作品)を取り上げているので、すっきりとしている。

第一章の「隣人としての異教徒」で取り上げるのがコーランと、それに独特の解釈を施したナギーブ・マフフーズであることは象徴的だ。その後取り上げる作家たちの多くがキリスト教を軽視するフランス人に驚いたり、「男のイスラム」しか理解してくれないイギリス人に苛立ったり、あるいはイスラムを歪めてしまうアメリカ人に激怒したりしているらしいのだから。つまりは、対ヨーロッパにしろ対アメリカ合衆国にしろ、アラブの人々が他者に違和感を抱くとき、そこに宗教の軸が入り込むことも多々あるらしいからだ（そのため著者はときおり、「文明の衝突」と口にしたい誘惑に駆られているようにも見える）。

そしてまた、あたかもコーランのアレゴリーのように『我が町内の子供たち』という小説を紡ぐノーベル賞作家マフフーズは、八木氏の前著の主役であった。それだけ知悉した対象であれば、「忘却という過ち」を犯すユダヤ教やキリスト教の人々を批判し、その点においてイスラムの正統的な見方を踏襲するかにも見えるマフフーズのアレゴリー的小説が、一方でまたイスラムの正統からは大きく外れた思想をも展開するという対位法的な読みを加えることもできて当然というものだ。

実際、ここで扱われた多くの作家、知識人、ジャーナリストのうちでも、マフフーズの存在は独特なようだ。マフフーズは本書の中でもう一度登場する。『イブン・ファットゥーマの旅』という、『イブン・バットゥータの旅』を下敷きにしたことがタイトルからも見て取れる、これまたアレゴリー的な遍歴の小説が分析の対象として取り上げられるのだ。イスラム精神を忘れた「イスラムの地」を出た主人公が、「ジャバルの地」という理想郷を求めて旅をするというストーリーのこの小説で、主人公が途中に立ち寄る場所のひとつが「ハルバの地」といい、これがアメリカ合衆国そのものだと八木氏は分析している。そしてまたその地に対する態度にマフフーズの独自性があるのだという。いったんはアメリカ合衆国に対するステレオタイプとも言える批判が展開されはするものの、

> 主人公が「ハルバの地」を去るとき、必ず帰ってくることを誓ったというのも注目に値する。彼が戻ってくることを願ったのは、故郷の「イスラムの地」と「ハルバの地」だけだ。マフフーズがアメリカ社会の独善性、弱肉強食の非情さを批判しているのはもちろんだが、しかしなお、その魅力と可能性を認めていることもまた確かなのである。（211ページ）

「ハルバの地」、すなわちアメリカ合衆国に対するマフフーズ

の態度が特異なのは、第三章第六節に置かれたこの分析に先行して俎上に載せられた諸テクストにおいて、アメリカ合衆国は手厳しい批判の的となっていたからだ。第一節はタイトルからして「アメリカの野蛮」というものだ。ここで取り上げられるサイイド・クトゥブという思想家は、「アメリカに対する否定的な言説の代表」（116ページ）なのだそうだ。そのクトゥブは「アメリカ人のような劣った人間が世界を支配することは、人類全体にとっての不幸だと訴え」（124ページ）ているのであれば、なるほど、マフフーズとはだいぶ違って見える。

小説とその他の散文の違いだと言うことも可能かもしれない。小説がイデオロギーを前面に押し出し、一面的な読みしかできないのならば、それは駄作というもの。対位法的で多義的な読みを許すからこそそれは読む価値があるのだ。それに比してたとえばクトゥブの文章は小説ではない。アメリカ合衆国批判は直截的であっていい。

しかし……とアメリカ合衆国に対する激しい感情を抱かないではいられない別の地域を扱ってきた私などは思う。希望、期待と完膚無きまでの批判が同時に存在する、そうした両義的感情を引き起こしてきたのがまさにアメリカ合衆国という存在の特異さだったのではないだろうか。ウルグワイの批評家ホセ・エンリケ・ロドーはそれをして「北マニア」と呼んだのだ。

クトゥブの直截性に比すべきマフフーズの曖昧さは、こうした「北マニア」のごとき両義的感情のより模範的な例になっているとも言えるのではないだろうか。エジプトにとってアメリカ合衆国は「北」ではない。西洋のさらに西の先にある極西とも呼ぶべき場所にある。それを無理してロドー風に「極西マニア」と呼ぶ必要もないのだろうが、ともかくそうした「マニア」のあり方を叙述しているのが本書の特徴である。

かつて世界は少数の宗主国群と圧倒的多数の植民地から成り立っていた。その後、ただ一つのアメリカ合衆国とそうではない圧倒的多数の地域から成り立っていた。今ではさらに違うしかたで捉えた方が妥当ではあるだろうが、ともかく、この歴史的な情勢の存在様態の一局面を叙述したことが『アラブ・イスラム世界における他者像の変遷』の達成だろう。

（柳原孝敦）